

詩編 3-14編の編集と構成
——Hossfeld-Zenger 説をめぐって——

飯

謙

Summary

On the Redaction and the Structure of Pss. 3-14

KEN II

Frank-Lothar Hossfeld and Erich Zenger considered a redactional process of Pss. 3-14 in their thesis "‘Selig, wer auf die Armen achtet’ (Ps 41 : 2) Beobachtungen zur Gottevolk-Theologie des ersten Davidpsalters", *Jahrbuch für Biblische Theologie* 7 (1992). They presumed four stages of the process, that is, a) preexilic era, b) exilic era, c) postexilic era, and d) hellenistic era. Though they pointed out words and motifs, that occur repeatedly in Pss. 3-14, in detail, they did not investigate the cohesion of this psalmsgroup. I criticize their scheme from this synchronical aspect, and insist that the cohesion among the psalms should be examined. Hossfeld and Zenger thought of the redactors of the first Davidpsalter, namely Pss. 3-41, as poor (*ny*, *nw*). I indicate that the poor in Pss. 3-14, heathens in Pss. 15-24, and sinners in Pss. 25-34 are the implied key-character of each psalmsgroup. So the poor were not the redactors of Pss. 3-14 as Hossfeld and Zenger proposed. I suggest that the redactors should be lower priesters who could sympathize with the weak, like the poor, as well as the heathens and sinners.

近年、旧約詩編 (Psalter) の研究は、その主要な課題を今世紀前半からの主流であった類型史や祭儀史より配列の問題に移して、展開しはじめている。その提唱者となったのは、N. Fuglister, N. Lohfink, F. -L. Hossfeld, E. Zenger ら独語圏の旧約学者たちであるが、特に聖書注解叢書 *Die Neue Echter Bibel* の『詩編』を執筆した Hossfeld と Zenger は、とりわけ主導的な役割を果たしている¹⁾。本稿では、第一ダビデ詩編冒頭の構成体 (詩 3-14編) に対する彼らの見解を概観する中でその基本的な手法を検証し、われわれの方向を模索したいと考える。

Hossfeld と Zenger は、文献批判的方法を宗教史的な枠組の中で運用し、旧約詩編成立のモデルを構想する。この点は、かつて J. Wellhausen が、彼以前に行われた文献批判的な分析を取り入れ、そこから彼が想定した文献資料を、自身の描く古代イスラエル宗教史に沿って各時代に振り分けていったことと似ている²⁾。しかし Wellhausen に続く欧米の研究者たちは、あまりにも機械的、かつ恣意的な分類を行ったため、やがて仮説が乱立し、結果的に研究の混乱と停滞を招いた。そうしてこの状況を打開、補完するべく、共時的な方法が提唱されていったのは周知の通りである³⁾。Hossfeld と Zenger も当然、旧約研究の両輪とも言うべきこれら二つの視点に精通した研究者であり、その分析において、通時と共時をほどよくかみ合わせた議論を展開している。しかしある面では、自身の立てたモデルに固執し、全体を強引に整理しすぎるくらいがないとも言えない。そのモデルとは、以下に示すように、旧約詩編の成立のプロセスを、大まかに四期に、すなわち、捕囚前、捕囚期、捕囚後、ヘレニズム期に分割したものである⁴⁾。

1) 捕囚前 この時期の信徒の祈りや王の祈りは、政治的迫害、病、社会的困難などさまざまな苦難の状況の中で、ヤハウェへの祈りを通して克服を目指した詩人の姿を、嘆きの歌や祈願の歌によって描き出す。ここではそれほど形式にとらわれない詩が創作された。

2) 捕囚期 捕囚前の祈りが、それぞれ小冊子 (Kleine Kompendien) にまとめられる。その中で貧者の詩編を担った集団の意識 (Gruppenbewußtsein) が形成された。そこで「貧しき者」という語、あるいは申命記主義者的な術語が、この段階の編集を判断する指標となる。各作品の詩人は、その集団の代表者としてわれわれの前に現れる。

3) 捕囚後 貧者の編集 (Armenredaktion) が捕囚期の作品に補筆する。その中で、典型的な貧しき者を、真のイスラエルの代表と見なすことに目標を置いた。それは、ヤハウェとの密接な関係を自覚して、イスラエル内の敵に対して抵抗しうる者である。

4) ヘレニズム期 貧しき者の概念が、内外からの脅威にさらされたイスラエル全体へと拡張される。この中で作品の表題に基づいて「ダビデ化」がなされ、ヤハウェによって敵の手から救われたダビデの姿と全イスラエルが同定され、強調される。

このようなモデルから Hossfeld と Zenger は各作品を読み、編集層を取り出して、旧約詩編

成立の史的、思想的な背景を明らかにしようと試みた。Hossfeldらは第一ダビデ詩編第一の集合である詩編3-14編の形成過程を次のように想定する。1) 捕囚前に詩編3-7編が蒐集、配列され、部分集合が成立、2) 捕囚期に詩編12編9節と14編6節が付加されて、11-14編の集合が成立、3) 捕囚後に詩編3編9節bと14編7節、および8編3節が付加されて、詩編3-7、8、11-14編の集合が成立、4) ヘレニズム時代に詩編9-10編が挿入され、3-14編の構成体が現在の形態をとった。

上述したように、彼らの見解にはかなり乱暴な部分がある。とりわけ捕囚後とヘレニズム期における資料分類について、さらに議論されるべきであろう。以下、その論評を行いたい。

I. 捕囚前の編集——詩編3-7編

HossfeldとZengerは、詩編の構成体3-14編の中でも、最初に3-7編が捕囚前に成立したと見る。この小集合に含まれる5つの作品は、いずれも「敵の詩編」であり、語彙の面でも共通している⁹⁾。彼らはまず、この小集合における両端の作品である詩編3編と7編の共時的な連関に着目する。その主なものとしてあげられるのは、a) 軍隊による迫害の状況描写(3:8, 7:12-14), b) 両作品が敵対者の表記に詩編4-6編に見られない rs' を用いる(3:8, 7:10), c) 呼びかけ「お立ちください、ヤハウエよ」($qwmh Jhw h=3:8, 7:7$), d) 両作品とも表題文でダビデの苦難史に言及している点である。Hossfeldらは、この第3点目が戦争と法的な文脈、すなわち王の職務の領域で用いられていること、そして第4点目が「看過できない王の特徴」を示していることを指摘して、この両作品の作者が王であると述べる。ここから彼らは成立年代を、イスラエルになお王の存在した捕囚前であるとするのである(ただし3編9節b「あなたの民の上に、あなたの祝福が」は、後述するように原作品にはなかったと見る)。

次に彼らは、この小集合の内部構造を構成する詩編4-6編の内容を、それぞれ次のように要約する。すなわち、詩編4編は数と力に頼む者たちによって引き起こされた社会的困難の中での祈り、5編は公然の偽証と虚偽の告発による権利の危機の中での祈り、6編は深刻な病の中での祈り、である。Hossfeldらはそこに「生命への敵対」とでも総称される共通テーマを見る。それゆえ、詩編3-7編は、生命の危機にある中で歌われた民衆の歌を、王の詩編が枠づける形式になっていることになる。

ではその外枠と内枠の作品に、何が統一性を与えているのか。HossfeldとZengerは、それが「朝のモチーフ」であると言う⁹⁾。それはヤハウエが、「夜と悪を終わらせる朝もしくは昼の『陽』として輝き出るという視座を確信」させるものである⁹⁾。彼らはこのモチーフを、3編5-6節、4編9節、5編4節、6編7節、7編12節に見る。これらのうち4、6、7編には「朝」(bqr)という単語が直接記されていない。そこで次のような説明を加える。

1) 4:9 「平安のときと、同じように、わたしは横になり、そして眠ろう。なぜならば、あなただけが、ヤハウエよ、信頼して、わたしに腰を落ち着けさせてくださるからです」は、詩人が翌朝のよい目覚めを確信するから口にできる言葉である。

2) 6:7 「わたしはあふれさせます、一晩中、わたしの寝台を、わたしの涙によって。わた

しの寝床を、わたしは押し流します」は、ヤハウェが敵を夜のうちに破り、その夜に朝が続くとの確信があると言う。

3) 7:12 彼らはこのテキストで、一般的に「毎日」とか「いつも」と訳される *bkl-jwm* を取り上げる。Hossfeld らは、これが「一日中」や「常時」など恒常性を意味する副詞ではなく、具体的に「日中」を表すという。

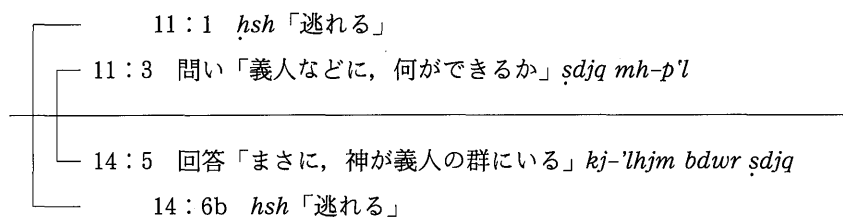
以上から、彼らは詩編 3-7 編の中に、ヤハウェが古代オリエント的・エジプト的な太陽神の伝統を継承するというメッセージを読みとる。これもまた、彼らのテキスト年代の決定に、少なからぬ影響を与えたと思われる。

われわれは、詩編 3-7 編を独立した小集合ととらえる彼らの見解はおおむね妥当なものであると考えるものの、編集の時期を捕囚前と断定する点やテキスト分析の細部に疑問を感じないわけではない。敵のモチーフや朝のモチーフの共通性も指摘されている通りであるが、最後の 7 編 12 節を「日中」ととる理解に対しては疑義の念を抱く。筆者が旧約詩編について調べたところ、*kl-jwm* とその応用形が「日中」を表す例は皆無である⁹⁾。これは Hossfeld と Zenger がなす他の分析についても該当することなのだが、彼らの作業はモチーフや単語の重なりを指摘するにとどまり、それらがどのように推移しているかという共時的な考察に欠けている。それゆえいま取り上げた個所についても、かなり強引な結びつけと言わざるを得ない。たとえば「朝のモチーフ」であれば、その色彩は 3 編から 7 編へと進む中で薄められていると見るべきではないだろうか。その移行にどのような意味作用が生ずるかを考察すべきである。3 編と 7 編を比べて見ると、どちらも嘆きの歌という点は共通しているが、後者においては無実性が強調されている (4-6 節)。これは事態の緊急性をより高める技法であると解せる。このようにモチーフの移行、もしくはテキスト結束性が深く検討されるべきであろう。

II. 捕囚期の編集——詩編 11-14 編

Hossfeld と Zenger は、小集合詩編 11-14 編に共通するのは否定的な世界観である、と言う。そうしてこの小集合の編集が捕囚期に行われたと見た。彼らは、7 節までである詩編 14 編の原作品が元来 5 節で終わっていたと言い、6 節「貧しい人の企図を、お前たちは辱める。まさに、ヤハウェこそが、彼の逃れ (*'št-nj tbjšw/kj Jhwh mšhw*)」を捕囚期の増補部と解する。彼らの判断の指標は、まず第一に、詩編 14 編 1-5 節の構成と彼らが捕囚期の作品と判断した詩編 36 編の構成とが酷似していること、第二は、いささか機械的に過ぎるとの観を抱くのではあるが、この詩行において「貧しい人」(*'nj*) という単語が用いられていることである。Hossfeld らは、捕囚期に貧者の詩編を担った集団の意識が形成されたと考えたが、この 6 節 a によって、編集者が 14 編 1-5 節の原作品を、「貧しき者の詩編」に仕立て直したと言うのである。確かにこの「貧者の視座」は、1-5 節には見られない。第三の指標となったのは、語根 *hsh* 「逃れる」を含む 6 節 b と、この小集合冒頭の 11 編 1 節「ヤハウェへと、わたしは逃れます」(*bJhwh hsjtj*) との間のインクルージオである。彼らは、6 節 b が 11 編と 14 編とを梓づけるための挿入であったと見る。また彼らによれば、11 編 3 節「まさに、土台はへし折られた。義人が

何をなすのか」という問いは、14編5節「まさに、神が義人の群にいる」において答えられている。つまり編集者は、神が義人の傍らにいたので、義人のなすことは、神の祝福を受けると語ろうとしていると言うのである。それゆえ、Hossfeldらは、11編の冒頭と14編の終結との間に、次のような二重のインクルージョンを認める。



こうして彼らは、この集合の内枠にあたる12, 13編に目を向ける。彼らが捕囚期の編集の鍵語とした「貧しい人」(‘nj=14:6)は、複数形で12編6節に見られる(‘njjm, ‘bjwnjm)。しかし13編にはその同義語さえも見あたらない。そこでHossfeldらは、13編4節a「顧み、わたしに教えてください(‘njj)」の後半部を、「顧みてください、わたしの苦しみを(‘njj)」と読み換え、13編を「貧者の詩編」の文脈に組み入れる。このような読みは、かつてA. B. Ehrlichが提案していた¹⁰⁾。とはいえ、今日の趨勢として、写本や古代訳に典拠のないままにマソラ・テキストを改変することは慎むべきであろう。

であるならば、12編から13編への流れは遮断されているのか。筆者は、HossfeldとZengerが他に指摘した詩編12編と13編との関連性によって、両作品の連続は十分説明されると考える。まず彼らは、12編6節のヤハウエの宣言「虐げに苦しむ人たちのゆえに、貧しい人々のうめきのゆえに、いまわたしは立とう……わたしは救いを置こう」と、13編冒頭で4回繰り返される「いつまで」(‘d-‘nh)という詩人の訴えとが、対応する位置にあると説明する。その場合、「いつまで」は、約束の早期実現を求める叫びと解される。また、「救い」(jṣ’)が12編冒頭と中心部である6節におけるヤハウエの言葉、そして13編終結の6節と、それぞれ要となる位置で強調されていることも指摘される。さらに12編9節で、敵対者が「高ぶっている」と訳すべき動詞 *rwm* が13編3節でやはり敵対者の驕りを表すために用いられている点も、両作品のつながりを示す指標であると言う。

そうしてHossfeldとZengerは、この12編9節が編集的挿入であるとの可能性を述べる。その理由として彼らは、12編2-8節にまったく見られない敵対者の語彙 *rs’* が、9節に唐突に現れることをあげる。すなわちHossfeldらは、この語が11編で3度言及されるので(2, 5, 6節)、編集者が文脈を整えるために、この詩行を挿入したと解するのである。この嘆きに満ちた12-13編に、14編が「貧しき人の傍らに立つ神」というメッセージをもって答えている。Hossfeldらはこの小集合を、「ヤハウエこそが貧しき者を守る神であるとの確信を教える祈りの過程」と性格づける¹¹⁾。

このようにして、彼らは捕囚期に詩編11編1節から14編6節までの小集合が成立したと主張

する。このように読むとき、詩編11編における語り手である「まっすぐな者」(jśr=7節)は、12編で「貧しき者」(6節)と同定される。このモチーフは、13編に登場する「わたし」にエコーし、さらにその人物は14編でヤハウェから「わたしの民」(4節)と呼ばれる。Hossfeldらは、この呼称が申命記主義者の術語であるとし、この小集合の編集時期を捕囚期に割り当てる根拠とするのである。

III. 捕囚後の編集——詩編8編の挿入と3, 14編への加筆

HossfeldとZengerは、捕囚後の編集が、詩編3-7編と8編、そして11-14編をつなぐ構成体を成立させたと言う。彼らはまず詩編3-7編と8編の連関性から議論を始める。たとえば、8編6節「栄光」(kbwd)は3-7編に比較的好く用いられている(3:4, 4:3, 7:6)。また彼らは、詩編8編のリフレイン(2, 10節)で強調されているヤハウェの「名」は、7編を締めくくる18節「わたしはたたえよう、いと高き、ヤハウェの名を」を意識したものと考える。それは自然と言えるかもしれないが、その単語「名」を用いる9編3節との関わりはどのように考えたらよいであろうか。この点については後述する。この連関性についての分析で、Hossfeldらもっとも注意を促すのは、8編3節の解釈である。

- | | |
|---------------------|----------------------------|
| 3 a. 幼子と乳飲み子の口から、 | <i>mpj 'wlljm wjnqjm</i> |
| b. あなたは据えた、力を。 | <i>jsdt 'z.</i> |
| c. あなたを圧迫する者たちのゆえに、 | <i>lm'n šwrrjk</i> |
| d. 敵と報復する者を、鎮めるために。 | <i>lhšbjt 'wjb wmtnqm.</i> |

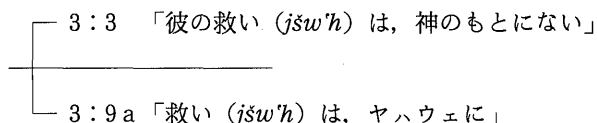
彼らはこのテキストが捕囚後の挿入であるとする。ここには詩編3-7編に頻出した二つの敵対者表現、*šwrr*と*'wjb*が見られる(*śr*=3:2, 4:2, 5:9, 7:5, 7, *'wjb*=3:8, 6:11, 7:6)。これが詩編3-7編と8編との関連をいっそう密にすると言う。そして3節dの「敵と報復する者」(*'wjb wmtnqm*)という記述は、捕囚期の増補部である44編17節に、またヤハウェがその民に「力」(*z*)を与えるという言葉は、捕囚後の増補部である28編8節と29編11節に見られる。そこでこのような表現が記述された年代を、捕囚期以後の時代に設定する。

しかしHossfeldらにとってより重要なのは、3節a「幼子と乳飲み子」が編集者集団の自己認識を示唆する可能性が高いということである。彼らは、W. Beyerlinの示唆にしたがって、この幼子が「苦しみ迫害された母なるシオンの『子』の隠喩」と解する¹²⁾。その口から語られる讚美が、3-7編で描き出された敵対者に対抗するためにヤハウェが基礎づけた「力」(*z*)となると言う。

8編6-9節では、王の語彙によって、3-7編における「王の祈り」が継承される。しかしここでは、王権が王のみならず、人間一般に与えられる。つまり上述した対抗の「力」(*z*)も、元来は王に帰属するものであった。しかしいまや被造者すべてにそれが与えられたと宣言されているのである。

ではこの一連の作品はここで、人間賛歌を歌い上げているのか。Hossfeld と Zenger は、そうではないと見る。それは捕囚後に編纂された小集合 3-7, 8, 11-14編の外枠の作品、すなわち、詩編 3 編 9 節 b と 14 編 7 節とを編集者の挿入と見なすところから読みとれる。彼らはこの作業によってこの構成体が新たな意味を獲得したと言うのである。

Hossfeld と Zenger は詩編 3 編の分析を行い、作品結部の 9 節の前半と後半が、文脈上、矛盾を来していると指摘する。9 節は「救いは、ヤハウェに [属す]。あなたの民の上に、あなたの祝福が [ありますように]」(*l'whw hjsw'h/l'mk brtkk*) という祈願である。9 節 a の内容は、単語レベルで、敵対者の語る 3 節 b 「彼の救いは神のもとにない」(*'jn jsw'th lw b'lhjm*) に反論し、さらに 8 節で表明されたヤハウェによる敵対者への報復の願い「まさにあなたが撃った、わたしの敵たちのすべてを。悪しき者たちの顎と歯を、あなたは砕いた」の延長線上にあると言える。そこで彼らは 9 節 a が文脈にかなっていると考える。



しかし彼らは後行がその流れを妨げていると見る。というのは、そこで用いられている「民」は 7 節の「民」と同じ単数の語であるのに (*'m*)、テキストを読むと、明らかに指示対象が異なる。すなわち、9 節 a ではイスラエル人、7 節では王である詩人を攻める「戦いの民」を意味する。後者は非イスラエル人を暗示するようにもとれる (筆者は、この「民」がそれぞれイスラエル人と非イスラエル人を指すとは思わない。むしろ 7 節の「民」が 8 節で裁きの対象とされていること、9 節のそれが救いの対象とされているという点で、テキスト内的な対話、あるいは反論を想定するべきではないか)。そこで Hossfeld と Zenger は 9 節 b を後代の挿入と判定する。彼らはこの構成体の担い手を「神の民」と呼ぶ。それは詩編 3 編の詩人が 9 節で神に対して「あなたの民」と、また神が 14 編 4 節で、その愛の対象を「わたしの民」(*'mj*) と呼んでいることから命名された。そうして彼らは、ここで提示された「神の民の視点」が、14 編 7 節にも採用されていることに目を向ける。

彼らは、詩編 14 編の終結部の分析に移る。Hossfeld と Zenger はまずこの 7 節の「シオン」という語に、1-6 節がいったい触れていないことに注意を促す。このテキストの前提には、集団間、もしくは階級間の闘争があると言う。すなわち作品の中では、神を否定する発言をなす「愚か者」(*nbl*) や「災いをなす者たち」(*p'lj-'wn*=4 節) とその対極にある「義人たち」(5 節) や「貧しき者」(*'mj*) とが対照されている。しかしこの詩編を締めくくる 7 節は、唐突に「全イスラエル」への救いを訴える。彼らは、このような作品の終結法が 25 編 22 節、28 編 8-9 節、29 編 11 節にも見られることをあげ、これらと共に 14 編 7 節が捕囚後の挿入であると結論づける。ここにおける「シオン」の強調は、詩編 3 編 5 節「彼の聖なる山」(*hr qdsw*) からの祝福を祈る行にも見られる。またヤハウェによる救いを語るこの挿入は、3 編 3 節で「救いはない」と語

る「多くの者」への反論ともなっている。

Hossfeld と Zenger は、これらの作業によって、詩編 8 編でヤハウェから「力」を受けた「幼子」らが、一般化された意味での人間全般ではなく、彼らが「神の民」と呼ぶ構成体の担い手たち、すなわち 3-7 編で言及された被被害者であって、11-14 編で明確化された貧しき者たちのことだと主張する。そうして Hossfeld らは、その方向がヘレニズム期にいたり、詩編 9-10 編の挿入によって強化されると言うのである。

IV. ヘレニズム期の編集——詩編 9-10 編の挿入

詩編 9-10 編は、ここで述べるまでもなく、元来は統一作品であったと言われる。この詩編は、*'nj* (貧しい者=9:13, 19, 10:2, 9, 12, 17), *'bjwn* (乏しい者=9:19), *dk* (虐げられた者=9:10, 10:18), *hlkh* (寄る辺なき者=10:8, 10, 14) など「貧者の語彙」が多数見られる点に特徴がある。Hossfeld と Zenger は、このアルファベット歌形式をとる「貧しき者の詩編」が、ヘレニズム時代に上述した文脈に組み入れられたと考える。彼らがまず着目したのは、以下に示すような、作品冒頭の 9 編 2-3 節と 5 編、7 編との並行である。

- | | | | |
|-------|---------------------------|--------|------------------------|
| 9:2 a | わたしは讃えよう、ヤハウェを、すべての心をもって、 | 7:18 a | わたしは讃えよう、ヤハウェを、その義のゆえに |
| 3 b | わたしはほめ歌おう、あなたの名を、いと高き者よ。 | 18 b | わたしはほめ歌おう、いと高き、ヤハウェの名を |
| 3 a | わたしは喜び、歓喜する、あなたのもとの。 | 5:12 a | あなたに逃れる者すべては、喜ぶ、…… |
| | | 12 c | 彼らは歓喜する、あなたのもとの。 |

Hossfeld らは、詩編 9 編が先行作品となる 7 編と 5 編から讃美の定型表現をとってきたと言う。彼らはまた、詩編 9-10 編で、貧しい者と敵が多様な概念で登場することに注意を向ける。「貧者の語彙」は詩編 3-7 編にはまったく見られなかった。詩編 9-10 編においては上述の通りである。敵対者については、詩編 3-7 編の主流であったイスラエル内の社会的な抑圧者 (*'wjb* =9:4,7, *šwrr*=10:5) と並んで、倫理性を欠く「悪しき者」(*rs*=9:6, 17, 18, 10:2, 3, 13, 15)、さらには外国勢力を指す *gwjm* (9:6,16, 18, 20, 21, 10:16) と *l'mjm* (9:9) や *'mjm* (9:12) が記されている。詩編 3-14 編の構成体において、これほど多くの貧者と敵対者の語彙が見られる作品はない。このずれを、Hossfeld らは、詩編 3-7, 11-14 編と 9-10 編との社会的・時代的な背景が大きく異なるためと想定する。そして 9-10 編では、それら個人的な敵と国家的な敵とが、入れ替わり登場する。ここから彼らは、詩編 9-10 編の成立を、セレウコス朝の異邦人とユダヤ人とが連合してイスラエルの秩序を破ったヘレニズム期とし、「人間」と訳される *'nws* (9:21) をその敵対勢力の集合概念と見た。

そうして彼らは詩編 9-10 編と、3-7, 8, 11-14 編との単語やモチーフの共通性を列挙してゆく。それは 3-7 編については、a) 「ヤハウェの名を愛する者」(5:12) と「ヤハウェを知る者」(9:11) という集団呼称の類似、b) シェオールに関する発言 (9:14, 6:6)、c) 「いと高き者」(*'ljwn*=9:3, 7:18)、d) 「義を裁く者」(*šwpt šdq*=9:5, 7:12) などで、数の上では 7 編が

多い。次に11-14編について見ると、a) ヤハウエの座 (9:5, 8, 11:4), b) 虚偽を語る舌への非難 (10:7, 12:4-5), c) 神が顔を隠すことへの嘆き (10:11) と告発 (13:2), d) 神を無視する悪しき者 (10:4) と愚か者 (14:1), などである。また詩編8編との重なりとして、a) ヤハウエの名への讚美 (9:3, 8:2, 10), b) 敵の術語 ('wjb=9:4, 7, swrr=10:5 と 8:3), c) 人 ('nws=9:20-21, 10:19, 8:5) があげられる。

しかし筆者の見るところ、語彙の重なる指摘を中心とする Hossfeld と Zenger の議論は、詩編9-10編が最終段階でこの詩編集合の文脈に組み入れられたことの証明とはならない。彼らの指摘する語彙レベルの連関は、詩編3-7, 11-14編と9-10編との関係をより深く示している。であるならば、むしろ3-7編と9-10, 11-14編とが元来、連続しており、その間に詩編8編が挿入されたと考える方が理にかなっている。すなわち、Hossfeld らが指摘する9-10編と7編との関連の量的な多さを考慮すると、編集者に当初、その両作品を結びつける意図があったと想定することができる。Hossfeld と Zenger は自身の立てた旧約詩編成立過程のモデルに固執するあまり、「貧しき者」が強調される詩編9-10編を強引に編集の最終段階に納めようと無理な結びつけを行ったのではないか。筆者はむしろ、詩編8編がこの構成体において最後に組み入れられた作品で、その冒頭部と終結部で用いられた「名」(*sm*) は、それをもって二つの小集合(3-7, 9-14編)を架橋するために、7編18節と9編3節の双方から転写されたと見る方が、無理なく説明できると考える¹³⁾。

V. 結 語

再三指摘したように、Hossfeld と Zenger の分析は、語彙上の重なる指摘とそれら鍵語を自身の立てた成立過程のモデルに割り振ることが中心で、各作品の共時的な結束性を検証する作業が十分とは言えない。また彼らがこの構成体の担い手とした「貧しき者」のセクトとしての性格が決して明確とは言えず、詩編の執筆者と想定される祭司あるいは歌うたいがこれらの集合においてしめる位置に注意が払われていない。にもかかわらず、彼らは「貧しき者」(*nj* あるいは *nw*) を一つの集団 (*eine Gruppe*) と見なし、テキスト分析の上でも重要な役割を与えるわけである。しかしこれを集団として認めることの是非は、前世紀末に A. Rahlfs が提案し、今世紀前半に G. Mowinckel や H. Birkeland らが反論を加え、なお結論に至っていない問題である。それゆえ、この取り扱いはより慎重であってよい¹⁴⁾。管見では、第一ダビデ詩編における第一の構成体である詩編3-7編では「敵に迫害される者」、詩編9/10-14編では「貧しき者」、第二の構成体である詩編15-24編では「異邦人」¹⁵⁾、第三の構成体である詩編25-34編では「罪人」が、それぞれヤハウエに受容される対象として描かれている。そうであるならば、彼らが強調する第一の構成体・詩編3-14編における「貧しき者」も、「具体的に苦しむ者」を表す語彙の一つとして、「異邦人」や「罪人」と同じく、相対化してゆく必要がある。その中で、旧約詩編の編集者の普遍的な視座が、より鮮明に、浮かび上がってくるのではあるまいか¹⁶⁾。

注.

- 1) N. Füglistner, Die Verwendung und das Verständnis der Psalmen und des Psalters um die Zeitwende, in : J. Schreiner (Hrsg.), *Beiträge zur Psalmenforschung. Psalm 2 und 22* (FzB 60), S. 319–384, 1988, S. 380 ; ders., Die Verwendung des Psalters zur Zeit Jesu, *BK 47* (1992), S. 201–208 ; N. Lohfink, Der Psalter und die christliche Meditation. Die Bedeutung der Endredaktion für das Verständnis des Psalters, *BK 47* (1992), S. 195–200 ; E. Zenger, Was wird anders bei kanonischer Psalmenauslegung? in : F. V. Reiterer (Hrsg.), *Ein Gott eine Offenbarung* (FS. N. Füglistner), 1991, S. 397–413 ; F. –L. Hossfeld-E. Zenger, *Die Psalmen* (NEB) 1993. 邦語では, 拙論「旧約詩篇の編纂と配列に関する一考察」『オリエント』35/2 (1993), 22–38頁, N. ローフィンク「詩編理解にとっての最終編集の意義」WAFS 刊行会編『主のすべてにより人は生きる』1992 所収, 石川立「詩編の様式と編集」『現代聖書講座第2巻』(木幡・青野編) 1996 所収。詩編3–14, 35–41編については, F. –L. Hossfeld-E. Zenger, “Selig, wer auf die Armen achtet” (Ps 41, 2). Beobachtungen zur Gottesvolk-Theologie des ersten Davidpsalters, *JBTh 7* (1992), S. 21–50. 本稿はこの論文を考察の対象としている。詩編15–24編については, dies., “Wer darf hinaufziehen zum Berg JWHWs?” Zur Redaktionsgeschichte und Theologie der Psalmengruppe 15–24, in : G. Braulik-W. Groß-S. McEvenue (Hg.), *Biblische Theologie und gesellschaftlicher Wandel* (FS. Lohfink), 1993, S. 166–182, 詩編25–34編については, dies., “Vom seinem Thronszitz schaut er nieder auf alle Bewohner der Erde” (Ps 33, 14) Redaktionsgeschichte und Kompositionskritik der Psalmengruppe 25–34, in : I. Kottsieper u. a. (Hg.), “Wer ist wie du, HERR, unter den Göttern?” *Studien zur Theologie und Religionsgeschichte* (FS. O. Kaiser), 1994, S. 375–388.
- 2) J. Wellhausen, *Prolegomena zur Geschichte Israels*, 1878 は, イスラエル宗教史を, 自然的な段階から倫理的そして祭儀的な段階への展開, あるいは民族的・特殊的な段階から個人的・普遍的な段階への展開としてとらえ, 旧約の文献批判的分析の成果を, 各段階に振り分けていった。木田 献一「聖書解釈の歴史——宗教改革から現代まで (8–9)」『聖書と教会』1988/5–6 所収を参照。
- 3) 野本真也「旧約学における文芸学的方法の位置」『基督教研究』42/1 (1978), 拙論「文芸学的方法——その理念と応用」『現代聖書講座第2巻』(木幡・青野編) 1996 所収, を参照。
- 4) 注1) に記した Hossfeld-Zenger, *JBTh 7* の論文, S. 49f. 参照。
- 5) 敵対者全般については, 拙論「旧約詩篇における敵対者と編集層」『日本の神学』33 (1994) を参照。
- 6) 「朝のモチーフ」については, B. Janowski, *Rettungsgewißheit und Epiphnie des Heils. Das Motiv der Hilfe Gottes “am Morgen” im Alten Orient und im Alten Testament* (WMANT 59), 1989 を参照。
- 7) Hossfeld-Zenger, a. a. O., S. 37.
- 8) Bibleworks for Windows Ver. 3.2 で検索したところ, *kl-jwm* とその活用形は, 7 : 12, 25 : 5, 32 : 3, 35 : 28, 37 : 26, 38 : 7, 13, 42 : 4, 11, 44 : 9, 16, 23, 52 : 3, 56 : 2, 3, 6, 71 : 8, 15, 24, 72 : 15, 73 : 14, 74 : 22, 86 : 3, 88 : 10, 18, 89 : 17, 102 : 9, 119 : 97, 140 : 3, 145 : 2 の31例が確認された。しかしこの語が「日中」を表す用例は見いだされない。
- 9) 共時的分析の指標としての「移行」「結束性」については, 注3) の拙論, 55頁以下を参照。
- 10) A. B. Ehrlich, *Die Psalmen*, 1905.
- 11) Hossfeld-Zenger, a. a. O., S. 44.
- 12) A. a. O., S. 41. さらに W. Beyerlin, Psalm 8. Chancen der berlieferungskritik, *ZThK 73* (1976), S. 1–22.
- 13) Hossfeld と Zenger は詩編7編と11編との共通性の指摘もしている。それは, ①導入句 (*hsh*=7 : 2, 11 : 1), ②集団の称号 (*šr-lb*=7 : 11, 11 : 2), ③ヤハウェによる審判 (*bhn*=7 : 10–12, 11 : 5) である (vgl. *JBTh 7*, S. 45)。しかしこれも9–10編が7編と11編との編集後に挿入された

可能性を物語るが、最終編集における挿入の証明とはならない。詩編8編と詩編の文脈との関わりについては、拙論「詩篇8篇2節の関係詞の指示対象と旧約詩篇の文脈」『基督教研究』56/1 (1994) を見よ。

- 14) A. Rahlfs, *'Ant und 'Anaw in den Psalmen*, 1892; H. Birkeland, *'Ant und 'Anaw in den Psalmen*, 1933. その他, H. -J. Kraus, *Psalmen* (BK 15/1), 1989⁶, S. 108-111; S. J. L. Croft, *The Identity of the Individual in the Psalms* (JSOTS 44) 1987, pp. 49ff. を見よ。
- 15) 拙論「統一体としての詩篇15-24篇」『神戸女学院大学論集』40/1 (1993), 15-32頁。
- 16) 筆者はこの構成体にいくつか神殿を示唆する語が使用されていることから(3:5, 5:8, 9:12, 14:7), この構成体の編集者を基本的にレビ人と考える。彼らはユダヤ教世界において、重視される地位にはなかった。そのゆえにこそ編集者たちは、共同体において場を喪失したと見える被迫害者や貧しい人、異邦人、罪人など、弱い立場にある人々を、ヤハウェの愛の対象として、連帯の眼差しをもって見つめることができたのである。拙論「詩篇55篇の文芸学的・社会史的考察」『基督教研究』53/1 (1991) 85-106頁, 94頁以下参照。

※この研究にあたり、1996年度神戸女学院大学研究所研究助成金を受領しました。記して、謝意を表します。

(原稿受理1997年4月14日)